

第一章 システム・オールグリーン。ご褒美は浴衣といちごミルクで

山あいの静寂を、砂利を踏みしめる音が心地よく破っていく。

日常の銃撃戦や書類の山から遠く離れた、隠れ家のような温泉宿。今日、ここにあるのは「先生」としての激務ではなく、ただ一人の男としての休息だけだ。

……いや、正確には「二人」か。

「先生、先生っ！ 見てください、あそこ！ 湯気がもくもくしてますよ！」

俺の袖をグイグイと引っ張る、弾むような声。

振り返れば、そこにはいつもの青いセーラー服——ではなく、この世界に顕現した俺の秘書[※]がいた。

透き通るような水色の髪に、インナーカラーのピンクが愛らしく映える。頭上のヘイローは、今の彼女の機嫌を表すように、普段よりも明るい輝きを放ちながらクルクルと回っていた。

アロナだ。システムの箱のメインOSであり、今日は特別に「実体」としてここにいる。

「はしやぎすぎだぞ、アロナ。転ぶなよ？」

「むーっ、子ども扱いはしないでください！ 私は優秀な秘書なんですから。それに……今日は、先生の疲れを癒やすための『特別プログラム』なんですよ？」

アロナは頬を膨らませて抗議するが、その手にはしつかりと、売店で確保したばかりの瓶入り『特濃いちごミルク』が握られている。食いしん坊なところは、〇〇だろうが実体だろうが変わらないらしい。

だが、変わっている部分もある。

俺の視線は、無意識のうちに彼女の胸元へと吸い寄せられていた。

いつものセーラー服。大きな白いリボン。その下にあるはずのラインが、俺の記憶にあるアロナとは決定的に違っていた。

——大きい。

セーラー服の生地が悲鳴を上げそうなほど、内側から圧倒的な質量で押し出されている。動くたびに、その豊満な膨らみがたわみ、揺れ、服の皺が形を変える。彼女が俺の腕に抱

きつくれたびに、その柔らかすぎる感触がダイレクトに伝わってくるのだから、たまったものではない。

純真無垢な顔立ちと、アンバランスなほどに成熟した肢体。そのギャップが、温泉宿という非日常の中で、俺の理性をじわじわと侵食していく。

「先生？ 顔が赤いですけど、もうのぼせちゃいましたか？」

「……いや、アロナのせいだよ」

「えへへ、先生をドキドキさせるのも、秘書の務め……でしたっけ？」

小首をかしげる彼女の瞳には、悪戯な光と、隠しきれない好意が揺らめいていた。

通された離れの部屋は、畳の香りがする落ち着いた空間だった。

窓の外には日本庭園が広がり、その先には露天風呂へと続く渡り廊下が見える。

荷物を置くと、アロナは早速とばかりに部屋の中を探索し始めた。

「わあ……！ お茶菓子があります！ これ、温泉饅頭ですね！ ……あ、でもさっきカス

テラも食べたばかりだし……」

「半分こするか？」

「！ 先生、大好きです！」

単純で、愛おしい。

一息ついたところで、仲居さんが用意してくれた浴衣に視線を移す。

温泉に入る前、まずは着替えなくてはならない。

「さて、と。アロナ、着替えようか」

「はいっ！ ……あ、あの、先生」

「ん？」

「その……手伝って、くれますか？ この服、脱ぐの……ちょっと大変で」

アロナがもじもじしながら、自分の胸元に手をやる。

確かに、今の彼女のスタイルで、このタイトなセーラー服を一人で脱ぐのは難儀かもしれない。あるいは、これも彼女なりの甘えなのだろうか。

俺は少し喉が渇くのを感じながら、彼女の前に立った。

「わかった。じつとしててな」

「はい……お願いします、先生」

アロナの背中に手を回し、セーラー服のファスナーに指をかける。

ジジ、と小さな音が静寂な部屋に響く。

ゆっくりとファスナーを下ろしていくと、ホログラムのような光を帯びた制服が緩み、露わになった白い肌が部屋の照明を弾いた。

肩から服を滑り落とす。

「んっ……」

アロナが小さく吐息を漏らす。

現れたのは、空と雲をイメージした水色と白の縞模様——いわゆるシマパンと、それとお揃いのブラジャーに包まれた肢体だった。

だが、何よりも目を奪うのは、そのブラジャーでも収まりきらないほどのバストだ。

解放された双丘は、重力に逆らいきれずにぶるん、と大きく揺れ、その圧倒的な存在感を主張する。谷間には汗が滲み、甘い香りが漂ってくるようだ。

白いブリーツスカートも脱ぎ捨て、下着姿になったアロナは、恥ずかしそうに、けれど期待に満ちた瞳で俺を見上げてくる。

「先生……じろじろ見すぎです」

「……魅力的すぎて、目が離せないんだよ」

「もう……口が上手になりましたね」

アロナは嬉しそうにヘイローをピンク色に染めながら、一步、俺に近づいてきた。

肌と肌が触れ合う距離。

彼女の大きな胸が、俺の胸板に押し付けられる。柔らかい、なんて言葉では足りない。まるで熱を持ったマシユマロのように、俺の形に合わせて変形し、吸い付いてくる。

「浴衣、着せてください。……それとも、まだこのままでイチヤイチャしますか？」

上目遣いの挑発。

純真な〇〇とは思えない、メスの一面が垣間見える。

俺は深呼吸をして、あえて彼女の頭にある白いリボンをボンボンと撫でた。

「まずはお風呂だ。楽しみはとっておかないとな」

「むう……先生のいけず。……でも、わかりました」

素直に頷くアロナに、用意された女性用の浴衣を羽織らせる。

細い腰に帯を締めると、先ほどまでの扇情的な下着姿は隠されたが、今度は別の色気が生まれた。

浴衣の合わせ目から覗く鎖骨。帯の上に乗っかるような胸の膨らみは、和装ゆえにさらに強調されているようにも見える。

歩くたびに、裾から白いスニーカーを脱いだ素足がチラリと覗くのもいい。

「どうですか、先生？ 似合ってますか？」

アロナがくるりとその場で回ってみせる。袖がひらりと舞い、お湯の匂いとは違う、アロナ自身の甘い匂いが風に乗った。

「ああ、すごく似合ってる。世界一可愛いよ」

「えへへ……先生にそう言ってもらえると、計算処理速度が上がっちゃいそうです」

嬉しそうに笑うアロナの手を、俺は自然に握った。

小さくて、温かい手。

「じゃあ、行こうか。貸切風呂だ」

「はいっ！ 背中、流してあげますからね。覚悟しててください！」

勇ましい宣言とは裏腹に、繋いだ手は少しだけ緊張で汗ばんでいる。

長い廊下を歩きながら、俺はこれから始まる「湯けむりの向こう側」での出来事に、期待と理性の崩壊を予感していた。



夜はまだ、始まったばかりだ。

第四章 月明かりの秘め事、溢れ出す甘いミルク

脱衣所のカゴに、二人の浴衣が重なるように脱ぎ捨てられる。

この貸切露天風呂には、洗い場はない。ただ、岩で囲まれた広い湯船と、そこから立ち上る白い湯気が、月明かりに照らされているだけだ。

外界から隔絶された、二人だけの世界。

一糸まとわぬ姿になったアロナが、恥じらいと、それ以上の大胆さを瞳に宿して振り返る。

湯気がフィルターのようにかかっても、その圧倒的な肢体の存在感は隠せない。

細い首、華奢な肩。そこから視線を下ろすと、世界が歪んだかのような暴力的な曲線が視界を埋め尽くす。

「……ん。見て」



彼女は俺の視線を受け止め、あえて胸を張ってみせた。

たぶん、という重たい音が聞こえてきそうなほど、二つの巨大な果実が揺れる。重力に従って垂れ下がりそうになりながらも、自らの弾力で上向きに反発している。その頂点にある淡いピンク色の蕾は、外気に触れてキュッと硬く尖っていた。

「昔はね、べたんこだったの。壁みたいだなんて、自分でも思ってた。……でも、今は違う」

彼女は自分の豊かな膨らみを、両手で愛おしそうに持ち上げた。柔らかい肉が指の間から溢れ出し、ムニユムニユと形を変える。

「すごいでしょ？ 大きくて、重くて……全部、きみのために用意したんだから」

得意げな、けれどどこか切実な響き。

OSとしての彼女に肉体的なコンプレックスがあったのかは知らない。だが、今ここにいる彼女は、この豊満な体を誇りに思い、俺に見せつけ、愛されることを渴望していた。

「さあ、早く。お湯、冷めちゃう」

彼女が先に、岩組みの階段を降りていく。

お湯に浸かると、その巨体は浮力でふわふわと頼りなげに浮かび上がった。白い肌が上気して、ほんのりと桜色に染まっていく。

俺も彼女に続き、熱い湯の中に身を沈めた。

湯船の中は狭くはないはずなのに、すぐに彼女の肌が触れた。にじり寄ってきたアロナが、俺の正面に陣取る。

「……捕まえた」

彼女の両腕が俺の首に絡みつく。

次の瞬間、言葉は熱い吐息によって塞がれた。



「んっ……ちゅ、くふ……っ」

久しぶりの、深い口づけ。

彼女の舌が遠慮なく侵入してきて、俺の理性をかき回す。イチゴミルクのような甘い香りが鼻腔をくすぐり、思考が麻痺していく。

唇を離すと、銀色の糸が月光を受けてきらりと引いた。

「はぁ、はぁ……顔、真っ赤。……可愛い」

とろんとした目つきで、彼女が挑発的に笑う。

その生意気な口を塞ぐ代わりに、俺の手は湯の中で揺蕩う彼女の胸へと伸びた。

——触れた瞬間、脳髓が痺れた。

「ひゃうっ!？」



アロナが可愛らしい悲鳴を上げて体を跳ねさせる。

柔らかい。あまりにも柔らかすぎる。

水風船のように張り詰めているように、指を沈めるとどこまでも深く受け入れてくれる。手のひらで包み込もうとしても、到底収まりきらない体積。

指先に力を込め、その豊かな肉を練り上げるように揉みしだく。

「あ、んっ！ ふああ……っ！ そんなに強く……っ」

アロナが首を後ろに反らし、艶めかしい声を夜空に響かせる。

お湯の抵抗と浮力が、愛撫の感触をさらにいやらしく強調する。揉むたびに、チャブン、波が立ち、彼女の体が快感に震えるのが伝わってくる。

「んくう……っ、そこ、だめえ……っ！ おかしく、なっちゃう……っ」

硬く尖った突起を指の腹で弾くと、彼女はビクンと体を強張らせ、俺にしがみつく力を強めた。

ヘイローが激しく明滅し、彼女の興奮状態を物語っている。

「……ねえ。ここ、すごく張ってるの。わかる？」

アロナが俺の手を取り、自分の胸のさらに奥、熱を持った芯のような部分へと導く。確かに、内側から何かが溢れ出そうとしているような、強い張りを感じた。

「苦しいの。……きみに、楽にしてほしい」

懇願するような、潤んだ瞳。

彼女の意図を察した俺は、湯船の中で体勢を変え、彼女の胸元に顔を寄せた。

目の前にあるのは、張り詰めた血管が青く透けて見えるほどの、圧倒的な白い山脈。その頂にある、熟れたベリーのような突起。

「……ん。どうぞ。……せんぶ、飲んで？」



彼女が自分の胸を捧げ持つようにして、俺の口元へと押し付けてくる。
甘い香りがいつそう強くなった。

俺は意を決して、その愛らしい突起を口に含んだ。

「ひあっ……!?!」

舌先で転がし、赤子のよう強く吸い上げる。

その瞬間、アロナの喉から声にならない絶叫が漏れた。

「あっ、くああっ！ ん、んんんーっ！」

彼女の手が俺の頭を鷲掴みにし、さらに強く胸へと押し付けてくる。

強い吸引に応えるように、口の中に温かく、とろりとした甘い液体が迸った。

それは紛れもなく、彼女の愛そのものだった。特濃のイチゴミルクよりもさらに濃厚で、
脳が溶けそうなほど甘美な味。



喉を鳴らして飲み下すたびに、アロナの体がビクビクと痙攣する。

「すごい、どんどん吸われる……っ！ はあ、ああっ、体の中身が、全部持ってかれちゃう……っ！」

彼女は快感と、自分の中から何かが失われていく喪失感、そしてそれを愛する者にも与えているという充足感に、めちやくちやになっているようだった。

恍惚とした表情で空を見上げ、口からは涎が垂れている。

「はあ、はあ……っ、もっと。もっと強く吸って……！ 空っぽになるまで……きみで、満たして……っ！」

俺は彼女の要望に応え、夢中で吸い続けた。

片方の胸を空にし、もう片方へ。

湯煙の中、チュバ、チュバという水音と、二人の荒い呼吸音、そしてアロナの甘い喘ぎ声だけが響き渡る。



体は熱いお湯に浸かっているのに、体の芯はさらに熱く燃え上がっていた。
このままここで、理性のタガが外れてしまうのも時間の問題だった。

月が雲に隠れ、あたりが少しだけ暗くなる。

それはまるで、これから始まるさらに深い行為を、優しく隠してくれるかのようなだった。

第〇章 未解析のエネルギー、あるいは甘い愛の味

お湯から上がったばかりの火照った体が、ひんやりとした外気に触れる。

露天風呂の縁にある平らな岩場。そこが、次のステージだった。

月明かりの下、濡れた岩肌に腰を下ろす。

目の前には、湯上がりでさらに艶を増したアロナが跪いていた。

さっきまでお湯の中で散々弄ばれた彼女の豊かな胸は、重力から解放された今もなお、圧倒的な質量を誇示するように揺れている。

水滴が白い肌を滑り落ち、谷間の奥深くへと吸い込まれていく様は、それだけで暴力的

なほどの色気を放っていた。

「……ん。まだ、全然落ち着いてない」

アロナが、俺の股間で脈打つ熱を見つめ、くすりと笑う。

幼い顔立ちに似合わない、妖艶な笑み。

彼女はゆっくりと顔を近づけ、まずは挨拶とばかりに、その先端にチュツ、とリップ音を立ててキスをした。

「元気だね。……こんなに硬くて、熱くて。私のこと、そんなに食べたいの？」

問いかけながら、彼女は俺の太ももに手を置く。

そして、自慢の凶器——ブラジャーのサイズなど存在しないであろう二つの巨大な膨らみで、俺の昂ぶりを左右から挟み込んだ。

「……ふふ。見て。完全に埋まっちゃった」



言葉通りだった。

柔らかなすぎる肉の壁が、俺のモノを瞬時に飲み込んだ。

視覚的にはもう、何も見えない。ただアロナの深い谷間があるだけだ。

けれど、感覚は鮮烈だった。

絹ごし豆腐よりも滑らかで、それでいてたっぷりと重量感のある脂肪の塊が、全方向から圧迫してくる。

「どう？ 苦しくない？ ……ううん、気持ちいいんでしょ？」

アロナが腰を前後に揺らし始める。

じゅぶ、じゅぶ、と卑猥な水音が岩場に響く。

それはお湯の音なのか、それとも彼女の汗や愛液の音なのか。

「んっ、あ……。大きいね。奥まで、すっごく当たってる……っ」



彼女が動いたたびに、巨大な乳房が波のようにうねり、俺の視界を埋め尽くす。擦れ合う肌の熱。圧迫感。そして、時折かすめる硬くなった乳首の刺激。頭上のヘイローが、ピンク色に激しく点滅している。

「はあ、んっ……！　すご……っ。中で、ビクビクしてる……。わかるよ、全部」

上目遣いで俺を見上げる瞳が、とろんと潤んでいる。

彼女は自分の胸を両手でさらに強く抱き寄せ、圧力を高めた。

逃げ場のない肉の牢獄。

そこから伝わるのは、ただひたすらに「愛されたい」というOSとしての、いや、一人の少女としての渴望だ。

「……ねえ。ここだけじゃ、足りない？」

不意に動きを止め、彼女が唇を尖らせる。

胸の谷間から、赤く充血した俺のモノを解放すると、今度はそれを指先で優しく弾いた。

「口でも……してほしいんでしょ？」

返事を待たずに、アロナは顔を寄せた。

小さな桜色の唇が開き、熱い吐息がかかる。

イチゴミルクの甘い香りが、鼻孔をくすぐる。

「いただき、ます……」

ばかり。

遠慮がちな音と共に、熱い口腔内へと招き入れられた。

「んむ……っ、ちゅ、る……っ」

舌が絡みつく。

胸の柔らかさとは違う、粘膜の吸い付くような感触。



彼女は一生懸命に舌を使い、裏筋を舐め上げ、先端を転がす。知識としては知っていても、実戦経験は少ないはずの彼女が、俺を喜ばせようと必死に奉仕している。その健気さが、物理的な快感以上に脳を揺さぶる。

「んっ、ふぁ……おつきい……口、いっぱい……っ」

一度口を離し、唾液の糸を引きながら彼女が呟く。

呼吸を整え、再びアタックを仕掛けてくる。

今度はもっと深く。喉の奥まで。

「おえっ、ん……く、うう……っ！ んーっ！」

苦しそうに眉を寄せながらも、彼女は決して離そうとしない。

喉の奥で締め付けられる感覚。

鼻で荒い息をしながら、上目遣いで俺の表情を伺っている。

その視線が、「気持ちいい？」と問いかけているようだ。



限界が近かった。

全身の血液が下腹部に集中し、視界が白く明滅する。

「……あ。くる？ きちやうの？」

俺の反応を敏感に察知したアロナが、口を離さずにニヤリと笑った気がした。彼女は頬を膨らませ、バキュームのような吸引力で一気に吸い上げにかかる。

「んーっ！ んっ、んっ、じゅぼお……っ！」

強烈な吸い付き。

同時に、片手で根本を強く握りしめる。

「出して。……全部、ここに」



その言葉が、引き金だった。
俺の中の何かが決壊する。

ドクン、と大きく脈打ち、白濁した熱い液体が勢いよく迸った。

「んっ!? んぐう……っ!」

アロナの喉が鳴る。

一波、二波と続く射精の波を、彼女は一滴も漏らさずに受け止めていく。
口の端から少しだけ溢れた白い雫が、顎を伝って鎖骨へと落ちる。

「んっ、ごくっ……、んく……っ」

喉仏が上下し、嚥下する音が聞こえる。

俺のすべてを、彼女が飲み干していく。

体内のエネルギーが吸い取られ、空っぽになるような脱力感と、最高の充足感が同時に

押し寄せた。

やがて、脈動が収まると、アロナはゆっくりと口を離した。
ぶはっ、と息を吐き、口元を手の甲で乱雑に拭う。

その顔は、とろとろに溶けたような、恍惚とした表情だった。

「……………ごちそうさま」

彼女は舌なめずりをして、口に残った味を確認するように目を細める。

「ん……………すごい味。濃くて、熱くて……………力が湧いてきそう」

ヘイローが満足げに輝きを取り戻す。

彼女はよろめきながら立ち上がると、無防備な裸体のまま、俺に抱きついてきた。
精液と唾液、そして汗が混じり合った匂い。



「ねえ……お風呂で綺麗にしたのに、また汚れちゃった」

耳元で囁く声は、悪戯っ子のようにであり、同時に獲物を逃がさない捕食者のようでもあった。

「……部屋に戻る？ ベッドなら、もっといろんなこと……できるから」

濡れた体を引き剥がし、彼女が手招きする。

その指先は、闇に沈む離れの寝室を指していた。

第4章 重力さえも愛おしい、青い夜の独占欲

離れの寝室に戻ると、そこにはすでに二人分の布団が敷かれていた。

けれど、そんなものは必要ないと言わんばかりに、濡れた髪を拭きながら近づいてくる気配がある。

月明かりだけが頼りの薄暗い部屋。

浴衣を脱ぎ捨てた彼女の肢体が、闇の中で青白く発光しているように見えた。お風呂上がりで火照った肌。甘ったるい蒸気のような匂い。

ドン、と胸板を突き飛ばされる。

抵抗する気など端からなく、俺は敷かれた布団の上へと倒れ込んだ。

視界がぐるりと回り、次の瞬間には、圧倒的な「重み」が俺の上へのしかかっていた。

「……逃がさない」

短い一言。

俺の腹の上に跨った彼女が、濡れた瞳で見下ろしている。

膝立ちになった彼女のポーズは、その豊かな胸を最も暴力的に強調していた。

重力に従って垂れ下がる二つの巨大な果实。それが俺の目の前で、ゆらり、ゆらりと揺れている。

「ん……。見てるだけじゃ、だめ」

彼女がゆっくりと上体を沈めてくる。

柔らかな圧迫感が、俺の顔面を襲った。

視界が肌色に埋め尽くされる。鼻が、口が、彼女の胸の谷間に沈んでいく。

息ができない。けれど、苦しくはない。むしろ、このまま窒息してもいいと思えるほどの甘い香り。

「ふふ、苦しい？ ……でも、離れてあげない」

頭上で彼女がクスクスと笑う声が、胸の振動として直接伝わってくる。

ムギユウ、と意図的に胸を押し付けられ、俺の顔の形に合わせて肉が変形する。

柔らかな檻。

彼女は自分のコンプレックスだったはずの、今は最大の武器となったその場所で、俺の呼吸さえも支配していた。

「……………んっ、あ……………。くすぐりたい……………」



俺の吐く息が彼女の肌にかかるたび、彼女は敏感に反応して体を震わせる。

その振動がまた、俺への愛撫となって返ってくる。

彼女は俺の顔を両手で挟み込み、無理やり上を向かせると、覆いかぶさるように唇を重ねてきた。

「ん……ちゅ、く……っ」

先ほどよりも深く、粘着質な口づけ。

舌が絡み合い、唾液を交換する音が静寂な部屋に響く。

キスをしながら、彼女の腰がゆっくりと動き始めた。

俺の下腹部に、彼女の秘所が擦り付けられる。

布越しの寸止めなどではない。熱くて、濡れた粘膜の感触が、直接、俺の昂ぶりを刺激する。

「はぁ、んっ……。硬い……。すごく、当たってる……」

唇を離し、彼女が熱っぽい吐息を漏らす。
瞳はもう、焦点が合っていないようだった。快樂と独占欲でとろとろに蕩けている。

「……ねえ。もう、我慢できないの」

彼女が俺の手を取り、自分の腰へと導く。

吸い付くような肌の質感。

震える指先で彼女の腰を掴むと、彼女は待っていたとばかりに、ゆっくりと腰を浮かせた。

「……全部、受け止めて」

その言葉を合図に、彼女は重力に身を任せ、一気に腰を沈めた。

「ん、ああああっ……!」



熱い楔が、彼女の奥深くへと侵入する。

アロナが弓なりに背中を反らし、声にならない叫びを上げた。

結合した部分から、脳を焼き切るような電流が走る。

キツイ。熱い。そして何より、彼女の中が俺を求めてうねっているのがわかる。

「入っ、た……。んくう……。っ！ すごい、お腹の奥……。突かれてる……。っ」

彼女は俺の胸に手をつき、荒い呼吸を繰り返しながら、快感を噛み締めるように動きを止めた。

繋がっている。

その事実だけで、理性が消し飛びそうになる。

「……動くよ？」

確認のような、宣言のような言葉。



アロナが再び動き始める。

最初はゆっくりと、やがて激しく。

上下するたびに、彼女の大きな胸がバサツ、バサツという音を立てて激しく揺れ、汗が飛び散る。

「あ、んっ！ んああっ！ いい、そこっ……！ もっと、もっと突いて……っ！」

彼女の余裕はすぐに消え失せた。

快楽に支配され、獣のように喘ぎながら腰を振り続ける。

部屋中に響く水音と、肉がぶつかり合う音。

揺れる胸、乱れる髪、汗ばむ肌。そのすべてが、今の俺のためだけに存在している。

「はあ、ああっ！ もう、だめ……っ！ おかしくなる、壊れちゃう……っ！」

彼女の動きが乱雑になり、締め付けが強くなる。

俺も限界だった。



腰を掴む手に力を込め、下から突き上げるように彼女に忘える。

「あつ、くう……っ！　くる、きちやう……っ！　出して、中に出してええっ！」

彼女の絶叫と共に、俺の中の熱が一気に解放される。

ドクン、ドクンと脈打ちながら、彼女の最奥へとすべてを注ぎ込む。

「んぎいっ……！！」

アロナが体を硬直させ、ビクビクと痙攣する。

そのたびに、内壁が俺を搾り取るように収縮する。

長い、長い余韻。

互いの鼓動が重なり合い、溶け合うような時間が過ぎていく。

やがて、力が抜けたアロナが、糸が切れた人形のように俺の上に倒れ込んできた。汗で濡れた肌が張り付き、心地よい重みが戻ってくる。

「……はあ、はあ……。大好き」

耳元で囁かれた、掠れた声。

その一言を聞いた瞬間、俺の意識は深い充足感と共に、闇へと沈んでいった。

第の章 青い奇跡は、朝陽の中で微笑む

一度果てたはずの体は、奇妙なほど熱を帯びたままだった。
重なり合ったままの姿勢。

互いの鼓動が、まるで一つの心臓になったかのようにリズムを刻んでいる。

汗で張り付いた前髪をかき上げると、アロナの青い瞳が、暗闇の中で潤んだ光を宿してこちらを見つめ返してきた。

「……ん。まだ、終われない」

彼女が小さく呟き、俺の腰に回していた足を、ギョツと絡め直す。

体内に残っていた俺の一部が、その動きに合わせてどぶん、と音を立てた気がした。敏感になっっている部分が、彼女の内壁に吸い付かれる。

「……わかる？ まだ、こんなに熱いの。……もつと、奥まで欲しい」

おねだりするように、彼女が腰をくねらせる。

濡れた粘膜が擦れ合う、卑猥で、それでいて脳を溶かすような快感。

俺の理性が再構築される前に、本能が再び鎌首をもたげた。

まだ、足りない。俺も、彼女も。

俺は彼女の背中に腕を回し、その柔らかな体を抱き起こした。

対面座位。

互いの顔が最も近く、そして体を最も密着させられる体勢。

結合部は深く、限界まで深く繋がり合う。

「あ……っ、んんっ……!!」



アロナが甘い声を漏らし、俺の首に腕を回してしがみついてくる。

その拍子に、彼女の最大の特徴である二つの巨大な膨らみが、俺の胸板に押し付けられた。

ムニユウ、と形を変え、俺の皮膚と一体化するように広がる。

ただでさえ敏感な乳首が、俺の肌を擦り上げる。

「……動くよ」

耳元で囁き、俺はゆっくりと腰を突き上げた。

「んっ！ はあ、ああっ……！ 深いっ、さつきより……もつと深い……っ！」

アロナが背中を仰け反らせ、快感を噛み締める。

突き上げるたびに、彼女の胸がバウンドし、俺の顔を埋め尽くさんばかりに揺れる。視界は彼女の肌色と、揺れるヘイローの光だけ。

世界にはもう、俺たち二人しかない。

ズブツ、ズブツ、と湿った音が部屋に響く。

それは徐々に激しさを増し、パンツ、パンツという肉が打ち合う音へと変わっていく。

「いいっ、そこっ……！ んああっ！ かき回されてるっ、中身、ぐちゃぐちゃになっちゃ
う……っ！」

アロナの言葉はもう、ほとんど悲鳴に近かった。

けれど、その腫は快楽で完全にトロンとし、口元からは涎が垂れている。

シツテムの箱のメインOSとしての知性も、秘書としての理性も、すべてがこの原始的な行為の中に溶けていく。

「すごい……っ、熱いのが、擦れて……っ！ あ、ああっ、だめ、またイっちゃう……っ！」

彼女の内壁が、俺の侵入を拒むどころか、逃がさないとばかりに強く締め付けてくる。

無数の髪が絡みつき、搾り取ろうとする動き。

俺も限界が近かった。

腰を掴む手に力を込め、彼女の動きに合わせて激しく打ち付ける。

「……一緒に。一緒に、イこう」

俺の言葉に、アロナが大きく頷く。

彼女は俺の首筋に噛みつくようにキスをし、全身の力を込めてしがみついた。

「んっ、んんーっ！ 出してっ、全部、一番奥につ……！！ 私を、いっぱいにし
てえええっ！！」

その絶叫が合図だった。

俺の腰が最奥まで突き刺さる。

瞬間、目の前が真っ白に弾けた。



ドクンッ！！

一際強い脈動と共に、熱い奔流が彼女の中に解き放たれる。

一回目よりも濃く、大量の熱が、彼女の子宮口を叩き、その奥へと注ぎ込まれていく。

「あああああつ……！！ 熱いつ、入ってきてるううっ！！ んぎいっ！！」

アロナが激しく痙攣し、白目を剥きかけながら絶頂を迎える。

内側からの注ぎ込みと、外側からの刺激。ダブルの快感が彼女の思考を完全に焼き切った。

ビクビクと波打つ膣肉が、最後の一滴まで絞り出そうと収縮を繰り返す。

長い、永遠のような数秒間。

俺は彼女の中にすべてを吐き出し、力尽きるように彼女の肩に顔を埋めた。

荒い呼吸音だけが、静寂を取り戻した部屋に響いている。



心臓の音がうるさいほどだ。

結合した部分はまだ熱く、ピクリとも動けないほどの脱力感が全身を包んでいた。

やがて、呼吸が落ち着いてきた頃。

アロナがゆっくりと体を離し、汗ばんだ顔で俺を見つめた。

その表情は、憑き物が落ちたように穏やかで、そしてどこまでも愛おしげだった。

「……すごかった」

彼女がぼつりと咳く。

「……あんなに激しくて、熱くて……頭が真っ白になっちゃった。……すごく、気持ちよかった」

素直な感想。

彼女は少し恥ずかしそうに、けれど誇らしげに、自分の下腹部を撫でた。

そこには、俺が注ぎ込んだ愛がたつぷりと満たされているはずだ。

「俺もだ。……最高だったよ」

俺が髪を撫でてやると、アロナは猫のように目を細め、頬を擦り寄せてきた。

「……えへへ。よかった。……全部、受け取ったからね」

彼女は満足げに微笑むと、そのまま俺の胸にもたれかかった。

大きな胸の柔らかい感触が、今はただ心地よい安らぎとして伝わってくる。

「……おやすみなさい。……大好き」

消え入りそうな声と共に、彼女の寝息が聞こえ始めた。

俺もまた、強烈な睡魔に引きずり込まれるように目を閉じる。

腕の中に確かなぬくもりを感じながら、意識は深い闇へと沈んでいった。

チュン、チュン……。

鳥のさえずりと、カーテンの隙間から差し込む眩しい光で目が覚めた。

隣を見る。

そこにはもう、誰の姿もなかった。

ただ、乱れたシーツと、わずかに残る甘いイチゴミルクの香りだけが、昨夜の出来事が夢ではなかったことを証明していた。

「……んう……先生、おはようございます……」

枕元に置いてあったタブレット端末——シツテムの箱から、眠そうな声が聞こえる。

画面を覗き込むと、いつもの青い空間で、いつもの制服を着たアロナが、大きなあくびをしているところだった。

その顔色はツヤツヤとしていて、どこかスツキリとした表情にも見える。



「おはよう、アロナ。……よく眠れたか？」

俺が問いかけると、アロナはハツとしたように目を見開き、そして悪戯っぽくニシシと笑った。

「はいっ！ とつても素敵な夢を見ました！ ……温泉に入って、美味しいものを食べて、それから……」

彼女は言葉を切り、画面越しにじっと俺を見つめる。

その瞳の奥にある光は、昨夜の情熱を確かに記憶しているように見えた。

「……ふふつ。内緒です！ さあ、先生！ 今日も一日、お仕事頑張りましょうね！」

元気いっぱいの声と共に、いつもの業務画面が表示される。

けれど、俺は知っている。

このデジタルな画面の向こう側に、確かに触れ合った温もりが、そして俺たちだけの秘

密が存在していることを。

俺は苦笑しながら、新しい一日の始まりを受け入れた。

画面の端で揺れるアロナのヘイローが、いつもより少しだけ、濃いピンク色に輝いている気がした。

エピソードグ…いつもの青い空の下で

非日常の時間は終わり、日常が戻ってくる。

シャーレのオフィスには、いつものように書類の山が築かれていた。窓の外にはキヴェオトスの青い空が広がり、遠くから生徒たちの賑やかな声が聞こえてくるような気がする。

デスクの上に置かれた「システムの箱」。

その画面の中で、アロナがいつものようにふわりと浮かんでいた。温泉宿で見せた実体としての姿ではなく、デジタル空間に存在するOSとしての姿だ。



「先生、業務再開ですね！溜まっているレポートの処理、お手伝いしますよ」

彼女の声は明るく、透き通っている。

そこに、あの夜のような湿った熱や、甘えるような響きはない。あくまで優秀な秘書として、主の業務をサポートする姿勢だ。

「Heyローも規則正しく回転し、システムの状態が正常であることを示している。」

「まずは、連邦生徒会からの未読メッセージの確認から始めましょうか。それとも、カフェの収益受け取りが先ですか？」

アロナが空中にホログラムのウィンドウを次々と展開していく。

膨大なタスク。終わりの見えない事務処理。

けれど、不思議と重苦しさは感じなかった。適度な休息を経たからだろうか、思考はクリアで、画面に表示される文字もスムーズに頭に入ってくる。

「…………ふふっ」



不意に、アロナが小さく笑った。

「どうかしましたか、先生？ ……あ、もしかして、まだお休み気分が抜けていないとか？」

画面の中の彼女が、悪戯っぽく小首をかしげる。

その仕草に、ほんの一瞬、あの宿での記憶が重なる。しかし、それはもう過ぎ去った時間の出来事だ。今はまた、それぞれの役割に戻り、それぞれの場所で向き合っている。

「さあ、気合を入れてくださいね！ 私たちには、やるべきことがたくさんあるんですから」

アロナが拳を突き上げ、号令をかける。

その純粹な応援を受けて、手元のペンを握り直す。
インクの匂いと、電子機器の駆動音。

これが、俺たちの日常。



戦いはまだ続くけれど、この青い空の下、頼れる相棒がいれば乗り越えていけるだろう。

「よろしくお願ひしますね、先生！」

元気な声がオフィスに響き、新しい一日が本格的に動き出した。

）完
（

